

大和雪原

日本人初の南極探検家白瀬中尉が名付けた南極大陸の「大和(やまと)雪原(ゆきはら)」が、正式の地名として登録される見通しであるとの報道がありました(11月21日付朝日新聞)。

国の南極地域観測統合本部が、白瀬隊の探検から100年になるのを記念して、南極研究の国際学会に提案するそうです。

白瀬中尉といえば、南極観測船の船名にも「しらせ」として登場しています。

さて、白瀬中尉の南極探検とはどういうものだったのでしょうか。

まず、当時の社会情勢を見ておきたいと思います。

1909年4月、アメリカ人の探検家ロバート・エドウィン・ピアリーが人類で初めて北極点に立つという快挙を成し遂げます。これを受けて、次は南極点に立つのはだれかという事が世界的にも注目されていました。

白瀬中尉は、幼い頃から冒険家になるのを夢み、いずれ北極点を目指そうとしていました。しかし、ピアリーによって先を越されたため南極を目指す事にしたのだそうです。

時期を同じくして、イギリスの冒険家ロバート・ファルコン・スコットやノルウェーの冒険家ロアルト・アムンセンが南極点を目指して準備を始めていました。

こうした中、白瀬中尉は、1910年7月に南極探検計画を公表しますが、これに対する政府の反応はすこぶる冷淡なものでした。イギリスが国を上げて南極点の一番乗りを目指していたことと比較すると、その対応の違いに驚きます。当時の日本は、僅か5年前に超大国ロシアと戦争し、勝利をおさめ、意気軒昂としていたはずですが、未知への挑戦に対しては、感度が鈍かったとしかいいようがありません。とても残念に思います。

こため、白瀬中尉は、資金集めから苦勞しなければなりませんでした。何とか、国民から義捐金が集まり出発できたのは、1910年11月に入ってからの事です。

また、探検に使用した船も、200トン余りの小さな中古の帆船に補助エンジンを付けたものでした。船の名は「開南丸」といい、日露戦争で活躍した東郷平八郎が名付け親となっています。

白瀬中尉を隊長とする総員27名の探検隊は、1910年11月28日芝浦港を

出発し、翌年の2月にニュージーランドのウェリントンで石炭や食料を補給した後南極に向かいますが、南極は既に冬季に入っており、途中でシドニーまで引き返しています。そして、同年11月、白瀬隊は再び南極を目指し、翌1912年1月28日、南緯80度5分、西経156度37分の地点を到達最南の地として引き返すこととなります。

残念ながら、白瀬隊は南極点を踏破することは出来ませんでした。資金難、脆弱な装備の下では仕方なかったと思いますし、全員無事に帰国できた事は、壮挙といえるべきです。何故なら、イギリスのスコット隊が南極点に到達しながら帰途遭難し、全員死亡するという悲劇にみまわれているように、白瀬隊も無理をすれば同じ事態を引き起こす恐れがありましたから、白瀬中尉の途中で引き返す勇気を讃えるべきでしょう。

白瀬中尉は、白瀬隊が到達した最南の地点一帯を「大和雪原」と名付け帰国しますが、これによって、白瀬中尉は、白人以外で初めて南極に足を踏み入れた冒険家となりました。

日本が、国として南極大陸にチャレンジし、昭和基地を建設したのは、白瀬中尉の冒険から遅れる事45年、1957年1月29日の事です。そして、日本人として最初に南極点に立ったのは、さらに10年後の1968年、第9次南極観測越冬隊によってでした。近代的な装備を以てしてもそれは大きな困難を伴うものであった事を思うと、白瀬中尉の南極探検が極めて困難で厳しいものであり、文字通り命がけの冒険であった事は想像に難くありません。

多くの困難を前にして、ひるまず、果敢に実行し、夢を実現させた白瀬中尉の冒険心や構想力、更には胆力、エネルギーは、現代に生きる我々の最も学ぶべきところではないでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）